

第一話..終わりなき機械調教の初日

「あがっ!! ひ、ぎいっ!! ……ゆるじ、で……ぐだ、ひや、いつ!!」
硬質なステンレスの拘束台に四肢を鉄製ボルトで固定され、一之瀬蓮の絶叫が地下実験室の壁に虚しく反響する。

耳をつんざくのは、建設現場の掘削機を思わせる、容赦のない工業用モーターの駆動音。

——ブイイイイイイン！

——ガガガッ！
ガガガガッ！！

「おッ……ほ♡お♡お♡お♡お♡お♡お♡お♡お♡ツ♡♡」

股間の裂け目に強引に突き立てられたのは、特注の超硬質スパイラルパイプ。

螺旋状の突起が、蓮の未熟な内壁を削り取るように回転し、前立腺と子宮口を同時に蹂躪する。

さらに、排泄器官にまでねじ込まれた極太のピストンマシンが、腸壁を裏返すような圧力で突き上げを繰り返していた。

——ジュポッ、ドチュルッ、ジュポポッ……！

「ひ、ぎっ♡ あ、あづ……っ♡ ち、ちくび、も……や、め……♡」
責め苦は下半身に留まらない。

蓮の平坦な胸板を覆うのは医療用真空ポンプを応用した吸引型乳首開発マシンだ。

透明なカップの中で、未開発だったはずの突起が強力な負圧によって根元から引き千切られんばかりに吸い上げられている。

真空状態でパンパンに充血し、どす黒い小豆色にまで腫れ上がった乳首が激しく熱を持つ。

それがマシンの脈動に合わせて『キュッ、キュッ』と小刻みに絞り上げられるたび、蓮の脊髄には電流のような快痛が走り抜ける。

（あ、ああ……！ 胸が、変になる……。ひっぱられて……じんじんして……、熱いっ……！）

上下から挟み撃ちにする、逃げ場のない快楽の暴力。

さらに、親指の先ほどにまで異常肥大させられたクリトリスには、二

本の電マがサンドイッチの形で密着していた。

——ガガガガガガッ!!

「あ、は、あああッ!! な、なにか……くるッ、あッ、変なのがっ!!」
神経が剥き出しになった一点に、毎分一万回転を超える超高速振動が叩き込まれる。

あまりに過激な刺激は、もはや快感という言葉では処理しきれない。
脳内の神経伝達物質が異常分泌され、蓮の思考回路は真っ白なノイズに塗り潰されていく。

（お、降りてきちゃダメ……ッ! いやだ、いやだ……! 俺は……男、
なのに……。なのに、あたまが、ぐちゃぐちゃになって……ッ）

——ブシャアッ! ブシャアッ!

蓮の意思とは無関係に、身体がメスの悲鳴を上げる。

尿道と膣口、二つの入り口から、限界を超えた愛液と失禁が虚空に向かって噴き出した。

床にはすでにN O・1ホストの尊厳が混じった巨大な水たまりがで

きている。

天井から吊るされたモニターは、彼の変化を冷徹な数値として刻み続けていた。

【被験者情報】

※心拍数… 一八〇 B P M（限界値付近）

※不安度… 一〇〇 %（精神崩壊予兆）

※快感度… 三〇〇 %（飽和状態）

※絶頂回数… 一九一九

※放置時間… 六時間（残り一八時間）

「あ、あ、ひぐっ、うあああ♡」

どんなに泣き喚こうが、感情なき機械は加減を知らない。

部屋を充満させるのは吐き気がするほど濃厚な、発情したメスの匂い。かつて潔癖だった蓮の心は自身の肉体が発散する淫らな香りと、機械の振動音によって、一分一秒ごとに白濁していく。

——これは彼が『人格を持った人間』から『ただの動く性具』へと作り変えられるまでの初日の話である。

☆ ☆ ☆

「……君のような美しい人を、僕は一人になんてさせない」

都内某所。繁華街。夜の街でNO.1ホスト、一之瀬蓮。二九歳。

その夜も、彼は完璧な『王子様』を演じていた。

中性的な美貌に、慈愛に満ちた言動。それが、彼が築き上げた最強のブランド『フェミニスト・ホスト』という姿。

（馬鹿な女。安い嘘に数百万も突っ込んで。ま、ありがたいけどさ）

蓮の内面は、氷のように冷めていた。彼にとって女は金を運んでくるATMに過ぎない。

彼がフェミニストを自称し、決して客と寝ないのには理由があった。

それは高潔な信念などではなく、自身の身体に刻まれた『カントボーイ』という忌まわしい秘密を守るための、絶対的な防衛策だ。

いつしかその秘密が、普通の女性への恨みとなり、憎しみとなり、それを隠して騙すことが生きるすべに変わっていた。

「触れるのは心だけで十分。可憐な君の純潔を汚すような真似はしたくないんだ」

そんな甘い言葉で煙に巻き、裸になる機会を徹底的に排除する。その『お預け』状態が、かえって女たちの独占欲を煽り、指名料を跳ね上げる。

嘘と欺瞞で塗り固めた、彼だけの必勝スタイル。そういう意味ではホストというのは天職と思っ込んでいる。

男の魅力を武器にして、女に囲まれる。雄として完全に勝ち組と自負しつつ、いつしかただの男すら内心で見下すようになっていた。

（にしても、初来店で指名してきたのが大企業・神宮寺グループの社長夫人とはな……神宮寺冴子。こいつは太い客だ……）

蓮は笑みを絶やさず、グラスを傾ける夫人を見つめた。三十代半ば、年相応の化粧とブランド物のドレスが彼女の富と余裕を物語っている。「蓮、あなたを気に入ったわ。今夜は本当のあなたを見せてほしいの」
冴子の甘い誘いに、蓮はいつもの勝利の微笑みを浮かべた。

「それは、アフターの希望……ってこと？」

「ええ。お金ならいくらでも出すわ」

（マジでチョロい。先に金を出すって言うてくれるのは楽でいいけど）
閉店後。店を出た蓮を待っていたのは、漆黒のリムジンだった。冴子に促されるまま車内に入り込み、最高級の革張りに背を預ける。
リムジンが滑るように夜の都内を走り抜ける。静まり返った郊外へと向かうにつれ、蓮の胸の内に正体不明の危機感が募り始めた。

「……どこまで行くんです？ まさか、ホテルじゃないですよね」

「まさか。蓮は客の女と寝るほど安っぽい男じゃないんでしょう？」

隣席の冴子が妖艶な笑みを浮かべてこちらを見ている。その言葉に少しだけ安心した。

「私だって、身体で男を繋ぎ止めようとするほど安っぽい女じゃないわ。」

まあ、本気じゃないのなら旦那も気にしないし、私も気にしないけど」

「夫婦の形はそれぞれですからね……」

「英雄色を好むってやつと割り切っているわ」

車はやがて、都内一等地にある巨大な城を思わせる邸宅の前で停まった。門には神宮寺グループのエンブレムが、月光に照らされて冷たく輝いている。

「……まさか、本当に自宅に連れていくつもりですか？」

「ええ。夫にはあなたのことは伝えてあるわ。『私の趣味』に協力してほしいってね」

（趣味……ねえ）

蓮は、内側から鍵が掛かる重厚な扉の音を聞いた。

エントランスホールの大大理石に、自分の足音が不気味に響く。天井のシャンデリアが眩すぎるほどに輝き、名画に見下ろされるその空間で、蓮は自分がまるでまな板の上の獲物になったような、形容しがたい居心地の悪さを感じていた。

「おお、思ったより早かったな、冴子」

ホールの奥から響いたのは、大気を震わせるような重厚な低音だった。足音と共に現れたのは、神宮寺財閥の総帥、神宮寺豪。

仕立ての良いスーツの上からでも判る、岩のように盛り上がった筋肉。その眼光は鋭く、蓮を射貫く。

どうやら、彼に話をしているというのは本当らしい。浮気と勘繰られたり騒がれたりするのは面倒なので、その点は少し安心できた。

「……旦那様、ですか。お邪魔しております」

蓮はホストとしての営業スマイルを張り付かせ、丁寧に頭を下げる。

だが、豪の口から出た言葉は、想定していたものとは正反対だった。

「冴子、こいつが例の『結婚詐欺師』か？」

その言葉に、蓮の背筋に氷を突き立てられたような悪寒が走った。

「え……？ 旦那様、何をおっしゃって……」

「とぼけないで、一之瀬蓮。……いいえ、八年前は『佐藤健斗』と名乗っていたわね？」

冴子が、氷のように冷たい笑みを浮かべて蓮に歩み寄る。

その瞳に宿る執念の光を見て、蓮の脳裏に、かつて数千万を貢がせて捨てた地味な女の面影が重なった。

当時は整形前だったのか、あるいは印象が違いすぎたのか。目の前の洗練された奥方が、あの時の獲物の一人であることに今さら気づいたのだ。

（しまった……こいつ、俺をハメるために……！）

「……っ、人違いです！　俺は失礼する！」

蓮が咄嗟に身を翻し、エントランスの重厚な扉へ駆け寄ろうとした瞬間。

背後から、鉄の万力のような太い腕が蓮の首筋を掴み、軽々と宙に吊り上げた。

「が、はっ……！？」

「逃がすか。冴子からむしり取った金の分……その身体で返してもらおう」

（く……苦しい……息が……っ！）

豪の低く、濁った声が蓮の鼓膜を震わせた。

それは法に訴える者の言葉ではなく、奪われたものを倍にして奪い返す、捕食者の論理だった。

「う、ぐうっ……！？ 離せっ、金ならっ、金なら今すぐ……！」

「黙れ。貴様に支払える額など、もうとっくに超えているんだよ。……
冴子が貴様を見つけ出すために、いくら使ったと思っている」

豪の巨大な掌が蓮の後頭部を鷲掴みにする。抵抗しようと暴れる蓮の細い腕など、岩のような筋力の前では羽虫の羽ばたきほどにも感じられない。首を締め付けられて呼吸ができず、酸欠でハクハクと口を動かしながら、蓮の意識は静かに落ちた。

圧倒的な質量の暴力。蓮は引きずられるようにして、壁の隠し扉の先——下へと続く階段へと連行された。

第二話…終わりになき機械調教の初日

——ピッ、ピッ、ピッ、ピッ……。

鼓膜を叩く無機質な電子音。

おぼろげな意識の淵で、蓮はその音を『どこかで聞いたことがある音だ』と思い出していた。ドラマで見る心電図の、あの死を待つような冷徹なりズムだ。

（……なんだか、消毒液の匂いがする）

鼻を突くツンとした薬品臭。聴覚と嗅覚が、ここが日常の延長線上にはない無菌室のような場所だと告げている。

（病院……？　なんでそんなところに……）

重い瞼を無理やり押し上げると、眩いLEDライトの暴力的な白光が網膜を灼いた。

そこは豪華な邸宅の地下とは到底思えない、手術室をさらに無機質に、より冷酷に作り変えたような、鈍い銀色の実験室だった。

（……っ、は、離せ……！）

反射的に叫ぼうとした声は、情けないほどに湿った音となって口内に籠った。

その時になってようやく、蓮は自分の口に、分厚いラバー製の猿轡が容赦なく嵌められていることに気づく。舌を抑え込まれ、顎を強制的に開かされる異物感に、胃の底からせり上がるような不快感が込み上げた。

「……っ、ふぁ、ふぁふぁ……っ！」

焦燥に駆られ身をよじったが、身体は微塵も動かない。

蓮が固定されていたのは、冷たい金属製の拘束台——いや、その形状は、むしろ分娩台に近かった。

膝を強制的に折り曲げられ、股間を無防備に突き出させるようにして、大きく左右に開かれた脚。手首と足首を締め付ける、逃げ場のない冷徹な鉄の感触。抗おうと力を込めるほど、細い四肢に金属の輪が無情に食い込んでいく。

「あら、目が覚めたのね」

唯一、自由が許された首を音のする方へ向ければ、そこにはタブレット端末を冷ややかに操作する冴子の姿があった。

（――そうだ、神宮寺のやつにハメられて……っ！）

その声に反応したかのよう、隣にいた豪がアルミ製の薄型ケースから『それ』を取り出す。

（……なんだ。じいちゃんが腰に使うやつ……か？）

一見すれば、家庭用の低周波治療器に似ている。だが、剥き出しの基板や無数に伸びる黒い配線は、それが治療を目的としたものではないことを雄弁に物語っていた。

豪が近づき、蓮の額、こめかみ、そして両乳首の周辺に、粘着質のパッチを躊躇なく貼り付けていく。

「これは脳波測定と、神経伝達をモニタリングするためのセンサーだ」
「電気治療器を、もっと……そうね、高性能で悪趣味にしたものだと思うって」

豪が説明し、冴子が冷ややかに笑う。肌に着するパッドの感触が、じわじわと体温を奪っていく。

（……で、結局なにがしたいんだよ、この女）

蓮が内心で毒づいた直後、豪がパッチの一枚を裏返して見せた。

「金属製の微細な電極が埋め込まれている」

そこから生えていたのは、針金よりもずっと細い、銀色の極細針の束だった。それが今、自分の皮膚に食い込んでいるのだと理解した瞬間、蓮の背筋に氷を押し当てられたような戦慄が走った。

——ウィーン。

天井から大型モニターが降りてきた。そこには、彼の「価値」を裁くような数値が並んでいる。

【被験者情報】

※心拍数… 一一〇 B P M (上昇中)

※不安度… 七十 % (強い不安)

※快感度… 情報なし

※絶頂回数… 情報なし

「体温や筋肉の震えなどの詳細な生体情報は私側で管理するけど、自分の状態をあなたも知りたいでしょ？」

「富裕層向けの最高級の玩具として、身をもって貢献してもらおう」

（何を……ふざけんな……！）

拒絶の言葉を飲み込む蓮の視界で、豪が巨大な裁ち鋏を取り出した。

無慈悲な金属音が響き、ホストとしての虚飾を象徴する数十万円のブランドシャツが無惨な布切れへと成り下がっていく。

「……っ!? ん……っ！」

露わになった蓮の胸元。丹念にケアされた白い肌が、地下室の冷気に晒され鳥肌を立てる。豪の無骨な指が、恐怖で硬くなった乳首を容赦なく捻りあげた。

（くそ……このド変態が……！）

必死に身を振り、指から逃れようと抵抗した瞬間。

——ジジジッ！

「あがああああ！？」

乳首のパッチから鋭い電流が全身を駆け抜けた。

「無駄よ。センサーがあなたの『抵抗意志』を感知すると、自動的に電気が流れる設定なの」

冴子の宣告と同時に、蓮の乳首に、医療用チューブに繋がれた透明な小型吸引カップが装着された。

——ズ、ズズ……ッ、シュパッ。

「ひ……あ、あああッ！」

機械的な吸引リズム。電流で過敏になった先端を、真空の力で強引に吸い上げられる感覚。

「今は弱めよ。赤ちゃんがおっぱいを飲むくらいの力、かしら？」

冗談じゃない。赤ん坊の吸い方など、これほど執拗で容赦ないはずがない。ジンジンと痺れる先端に、機械が絶え間なく脈動を伝え、蓮の意志とは無関係に感覚を昂らせていく。

「あら、口では嫌がつても、脳波は正直ね。……マゾなのかしら」

「乳首で感じるなんて、安物のメス同然だな」

悔しさに耐えかね、蓮は固く目を閉じた。しかし、視界を閉ざしたことで、かえって吸い上げられる感触や機械の駆動音が脳内で増幅されて響き渡る。

（やめろ……っ、変な感じに、なっ……！）

無慈悲な吸引は、ただ「反応を引き出す」ためだけの暴力的な効率性に満ちていた。吸引カップの中で、薄紅色の突起が限界まで引き延ばされ、充血してどろりと熱を帯びていく。

「……次はもっと気持ちよくなるように、後ろを『開発』してあげよう」

「その前に、ペニスにも装着しましょう。どれだけ精を絞り取れるか、データが欲しいわ」

（だめだ……それだけは……バレル……っ！）

蓮の心臓が、モニターの数値をさらに跳ね上げる。

【被験者情報】

※心拍数… 一一五 B P M（上昇中）

※不安度… 八十 %（強い不安）

※快感度… 四 %（微弱・上昇中）

※絶頂回数… 情報なし

豪が再び鋏を手に取り、蓮のズボンのベルトに刃を差し込んだ。

蓮は喉が潰れるほどの悲鳴を上げ、狂ったように腰を振って抗う。

だがその瞬間、乳首のセンサーから先ほどとは比較にならない高電圧が放たれた。

「ぎい、ああああああああっ！！」

激痛。そして、強烈すぎる刺激に脳がパニックを起こし、強制的に快感の回路が焼き切れるような「バグ」が生じる。

脊髓を直撃する痺れに、蓮の身体が弓なりに反り返った。拘束具がガチガチと音を立て、無理に広げられた股の間から、情けないほど甘い蜜のような愛液が溢れ出す。

神経が千切れるような痛みと、ドロドロとしたぬかるみのような快樂が混じりあう。

ガクガクと四肢を震わせる蓮のズボンが無惨に切り裂かれ――。逃げ場のないライトの下、太腿の内側の柔らかい肌が晒され、彼が命懸けで隠してきた「聖域」が、ついに白日の下にさらされた。

「……ほう。これは、予想外の『不良品』、あるいは『希少種』だな」
豪が驚くように目を見開き、その部分を観察する。一方で、冴子の瞳が、
獲物を解剖する学者のような色に染まった。

「く、ふ……あ、ああ……っ」

露出した熱い空気が、執拗に責められた蓮の秘部に触れる。極限の羞
恥と、電流が残した余熱に、蓮の意識は白濁した快楽の淵へと沈んで
いった。